（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　　宰主　上田啓之）

論語集註　後藤点
此爲書之首篇。故所記多務本之意。乃入道之門、積德之基、學者之先務也。凡十六章。
此れ書の首篇爲り。故に記する所、本を務むるの意多し。乃ち道に入るの門、德を積むの基にして、學者の先務なり。凡て十六章。

○　子の曰はく、學びて時に之を習ふ、また、説からずや。說、悦同。學之爲言效也。人性皆善。而覺有先後。後覺者必效先覺之所爲、乃可以明善而復其初也。習、鳥數飛也。學之不已、如鳥數飛也。說、喜意也。旣學而又時時習之、則所學者熟、而中心喜說、其進自不能已矣。程子曰、習、重習也。時復思繹、浹洽於中、則說也。又曰、學者將以行之也。時習之、則所學者在我。故說。謝氏曰、時習者、無時而不習。坐如尸、坐時習也。立如齊、立時習也。說は悦yuè（よろこぶ）に同じ。學の言爲る效（こう）なり。人の性は皆善。而して覺ることに先後有り。後覺の者は、必ず先覺のする所に效（なら）へば、乃ち以て善を明して其の初めに復（かへ）る可し。習は、鳥の數々（しばしば）飛ぶなり。之を學びて已（や）まざること、鳥の數々飛ぶが如し。說は、喜意なり。旣に學びて又時時之を習へば、則ち學ぶ所の者熟して、中心喜說し、其の進むこと自ら已むこと能はざる。程子（程頤、伊川、1033～1107）の曰く、習は重習なり。時復（ま）た思繹し、中（うち）に浹洽（しょうこう、あまねく行き渡る）すれば、則ち說ぶなり。又曰く、學者は將に以て之を行はん。時に之を習ふは、則ち學ぶ所の者我に在り、故に說。謝氏（謝良佐；顕道、1050～1103、程顥・程頤の門人、寿春上蔡「河南省」の出身）の曰く、時に習ふ者、時として習はざること無し。坐（ざ）するに尸（し）の如くするは、坐（すは）ふる時習ふなり。立つに齊（せい）するが如くするは、立つ時習ふなり。
　朋有りて遠方より來る、また、樂からずや。樂、音洛。朋、同類也。自遠方來、則近者可知。程子曰、以善及人、而信從者衆。故可樂。又曰、說在心。樂主發散在外。樂の音は洛lè。朋は同類なり。遠方より來れば、則ち近き者は知る可し。程子の曰く、善を以て人に及ぶ、信從する者衆し。故に樂しむ可き。又曰く、說は心に在り。樂は發散して外に在るを主とす。
　人知らず慍まず、また君子ならずや。慍、紆問反。慍、含怒意。君子、成德之名。尹氏曰、學在己。知不知在人。何慍之有。程子曰、雖樂於及人、不見是而無悶、乃所謂君子。愚謂、及人而樂者、順而易。不知而不慍者、逆而難。故惟成德者能之。然德之所以成、亦由學之正、習之熟、說之深、而不已焉耳。○程子曰、樂由說而後得。非樂不足以語君子。慍yùnは紆yū問wènの反（yèn→yùn）。慍は怒を含む意。君子は成德の名。尹氏（名は焞。1071～1142程伊川の高弟。）の曰く、學ぶは己に在り。知ると知らざる人に在り。何ぞ慍ることか之れ有らん。程子の曰く、人に及ぶを樂しむと雖も、是と見ずして悶（うれふ）ること無きは、乃ち所謂君子。愚謂へらく、人に及んで樂しむは、順にして易く、知られずして慍らざるは、逆にして難し。故に惟成德の者之を能くす。然れども德の成る所以は、亦學の正しく、習の熟し、說ぶこと深くして、已まざるに由るのみ。程子の曰く、樂しむは說ぶに由り而して後に得。樂しむに非ずば以て君子を語るに足らず。
■學と時習に関する長い議論が有る。何晏(193?～249)は、「時とは学ばんとする者の時を以て誦習するなり。誦習するに時を以てし、学びて業を廃する無き（論語集解）。」とし、学ぶべきことを暗誦し、それをづっと続けることとし、皇侃（488～544）は、「学は覚なり悟なり。言ふは、先王の道を用ひ、人の情性を導きて自ら覚悟し、非を去り是を取り、君子の徳を積成せ使むるなり（義疏）。」とし、「時とは、凡そ学ぶに三時有り。一は是れ人身中に就きて時と為し、二は年中に就きて時と為し、三は日中に就きて時と為す（義疏）。」とした。程子は重習、思繹、浹洽、說を言ひ、「習とは禽の飛を習ふが如し。(論語精義・二程外書)」とし、謝氏が坐しても立っても、時とは四六時中であるとした。言ふべきことに新味を出すために、朱熹は「学之為言效也」とした。效とは「博学・慎思・審問・明排・篤行は皆な学效の事なり」(楊願録)」ともしており、善を明らかにして善に返るともしており、孟子の性善をもカバーした。
読書会：[2011年4月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年4月9日)　[4月16日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年4月16日)　[6月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年6月4日)

○　有子が曰く、其の人と爲りや孝弟にして而して上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すこと好まずして、而して亂を作すことを好む者は、未だこれ有らず。弟･好、皆去聲。鮮、上聲。下同。有子、孔子弟子、名、若。善事父母爲孝、善事兄長爲弟。犯上、謂干犯在上之人。鮮、少也。作亂、則爲悖逆爭鬭之事矣。此言人能孝弟、則其心和順、少好犯上、必不好作亂也。弟tì･好hàoは皆去聲。鮮xiǎnは上聲。下も同じ。有子は孔子の弟子、名は若。善く父母に事（つこうま）つるを孝とし、善く兄長に事つるを弟とす。上を犯すは、上に在る人を干犯（かんぱん、逆らひ犯す）するを謂ふ。鮮は少なり。亂を作（な）すは、則ち悖逆（はいぎゃく、もとりそむく）爭鬭の事を爲す。此れ言ふは、人能く孝弟なれば、則ち其の心和順して、上を犯すを好むこと少なし。必ず亂を作すを好まざる。
　君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟は其れ仁を爲すの本か。與、平聲。務、專力也。本、猶根也。仁者、愛之理、心之德也。爲仁、猶曰行仁。與者、疑辭、謙退不敢質言也。言君子凡事專用力於根本。根本旣立、則其道自生。若上文所謂孝弟、乃是爲仁之本。學者務此、則仁道自此而生也。程子曰、孝弟、順德也。故不好犯上。豈復有逆理亂常之事。德有本。本立則其道充大。孝弟行於家、而後仁愛及於物。所謂親親而仁民也。故爲仁以孝弟爲本、論性則以仁爲孝弟之本。或問、孝弟爲仁之本、此是由孝弟可以至仁否。曰、非也。謂行仁自孝弟始。孝弟是仁之一事。謂之行仁之本則可。謂是仁之本則不可。蓋、仁是性也。孝弟是用也。性中只有箇仁義禮智四者而已。曷嘗有孝弟來。然仁主於愛。愛莫大於愛親。故曰、孝弟也者、其爲仁之本與。與yúは平聲。務は力を專（もは）らにするなり。本は猶根のごとし。仁は愛の理、心の德なり。仁を爲すは、猶仁を行ふと曰ふがごとし。與は疑辭、謙退して敢えて質（ただ）し言はざる。言ふは、君子は凡事、專ら力を根本に用ふ。根本旣に立たば、則ち其の道自ら生ず。上の文所謂（いはゆる）孝弟（こうてい）の若きは、乃ち是れ仁を爲す本。學者此を務むれば、則ち仁道此より生ず。程子の曰く、孝弟は順德なり。故に上を犯すを好まず。豈に復（ま）た理に逆ひ、常を亂るの事の有らんや。德、本有る、本立てば則ち其の道充大なり。孝弟家に行はれて後仁愛物に及ぶ。所謂親を親（しん）して民を仁する。故に仁を爲るは孝弟を以て本と為す。性を論ずれば則ち仁を以て孝弟の本とす。或ひと問ふ。孝弟は仁を爲るの本、此は是れ孝弟に由りて以て仁に至る可きや否や。曰く、非なり。仁を行ふは孝弟より始むを謂ふ。孝弟は是れ仁の一事。之を仁を行ふの本と謂ふは則ち可なり。是れ仁の本と謂ふは則ち不可なり。蓋し、仁は是れ性なり。孝弟は是れ用なり。性の中は只箇の仁義禮智の四つの者有るのみ。曷（なん）ぞ嘗て孝弟有り來らん。然るに仁は愛を主とし、愛は親を愛するより大なるは莫し。故に曰く、孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か。
■孟子、滕文公章句上四に、「昔し孔子沒し、三年の外、門人任を治めて將に歸る。入りて子貢に揖（ゆう）し、相嚮（むか）ひて哭し、皆聲を失ふ。然る後に歸へる。子貢反（かへ）りて、場に室を築き、獨り三年居（ま）す。然る後に歸へる。他日、子夏･子張･子游、有若聖人に似るを以て、孔子に事（つこうまつ）る所を以て之に事るを欲す。曾子に彊（し）ゆ。曾子の曰、不可。江漢以て之を濯（あら）ひ、秋陽以て之を暴（さら）す。皜皜乎として尙已すべからず。」とある。（孔子は）長江、漢水で身を潔め、秋の強い陽に身を晒し（大変な辛酸を経験され）汚れがない、その潔白なさまは、有若に比すべくもない。
読書会：[2011年6月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年6月11日)

○　子の曰はく、巧言令色、鮮なし仁。巧、好。令、善也。好其言、善其色、致飾於外、務以悦人、則人欲肆、而本心之德亡矣。聖人辭不迫切。專言鮮、則絶無可知。學者所當深戒也。程子曰、知巧言令色之非仁、則知仁矣。巧は好。令は善なり。其の言を好くし、其の色を善くし、外に飾を致し、努めて以て人を悦ばしむれば、則ち人欲肆（ほしいまま）にして、本心の德亡ぶ。聖人の辭迫切ならず。專ら鮮しと言ふは、則ち絶へて無きこと知る可し。學者の當に深く戒むべき所なり。程子の曰く、巧言令色の仁に非ざることを知れば、則ち仁を知る。
■子夏･子張･子游に推されたとはいへ、孔子の座に就いた有子の言葉は、己の本心から離れ、いかにも孔子らしくあらんとする。孔子らしくあろうとすれば、巧言であっても（自らの）直言にあらず。孔子らしい風貌をみせんとすれば、令色であっても朴訥たりえず。これでどうして、こころから相手を思う言葉が発せられよう。前句の有子の言行を巧言令色と戒めた。これに反対した曾子の言葉が以下に示された。

○　曾子の曰く、吾れ日に三つ吾が身を省る。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交はりて信ならざるか。傳へて習はざるか。省、悉井反。爲、去聲。傳、平聲。曾子、孔子弟子、名參、字子輿。盡己之謂忠、以實之謂信。傳、謂受之於師。習謂熟之於己。曾子以此三者、曰省其身、有則改之、無則加勉。其自治誠切如此。可謂得爲學之本矣。而三者之序、則又以忠信爲傳習之本也。尹氏曰、曾子守約、故動必求諸身。謝氏曰、諸子之學、皆出於聖人。其後愈遠、而愈失其眞。獨曾子之學、專用心於内。故傳之無弊。觀於子思･孟子可見矣。惜乎其嘉言善行、不盡傳於世也。其幸存而未泯者、學者其可不盡心乎。省は悉井の反xǐng。爲は去聲wèi（～のために）。傳は平聲chuán（伝へる孔子傳zhuàn）。曾子は孔子の弟子、名は參、字は子輿。己を盡くす之れを忠と謂ひ、實を以てする之れを信と謂ふ。傳は之を師より受くるを謂ふ。習は之を己に熟すを謂ふ。曾子此の三つの者を以て、曰に其の身を省み、有れば則ち之を改め、無ければ則ち勉を加ふ。其の自ら治むる誠切の此の如し、學を爲すの本を得ると謂ふ可し。而して三つの者の序は、則ち又忠信を以て傳習の本とする。尹氏曰く、曾子、約のこと守ること、故に動くに必ず諸を身に求む。謝氏曰く、諸子の學は、皆聖人より出づ。其の後愈々遠くして、愈々其の眞を失ふ。獨り曾子の學、專はら心を内に用ゆ。故に之を傳へて弊無し。子思･孟子を觀て見る可し。惜しいかな、其の嘉言善行、盡く世に傳はざること。其の幸に存して未だ泯（ほろ）びざるは。學者、其れ心を盡さざる可けんや。
■本当に人の為を思って行ったのか？友に本当のことを言ったか？習得できていないことを教えたのではないか？自分自身を生きることなくしては、仁はおろか、どこにも辿りつくことはできない。
読書会：[2011年7月2日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年7月2日)

○　子の曰はく、千乘の國を道（をさ）むるに、事を敬みて信、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす。道･乘、皆去聲。道、治也。千乘、諸侯之國、其地可出兵車千乘者也。敬者、主一無適之謂。敬事而信者、敬其事而信於民也。時、謂農隙之時。言治國之要、在此五者。亦務本之意也。程子曰、此言至淺。然當時諸侯果能此、亦足以治其國矣。聖人言雖至近、上下皆通。此三言者、若推其極、堯舜之治、亦不過此。若常人之言近、則淺近而已矣。楊氏曰、上不敬則下慢、不信則下疑。下慢而疑、事不立矣。敬事而信、以身先之也。易曰、節以制度、不傷財、不害民。蓋侈用則傷財、傷財必至於害民。故愛民必先於節用。然使之不以其時、則力本者不獲自盡。雖有愛人之心、而人不被其澤矣。然此特論其所存而已。未及爲政也。苟無是心、則雖有政不行焉。胡氏曰、凡此數者、又皆以敬爲主。愚謂、五者反復相因、各有次第。讀者宜細推之。道dǎo･乘shèngは皆去聲。道は治なり。千乘は諸侯の國、其の地、兵車千乘を出す可き者なり。敬は主一無適の謂（いひ）。事を敬して信は、其の事を敬して民に信あるなり。時は農隙（のうげき）の時を謂ふ。言ふは、國を治むるの要、此の五つの者に在り。亦本を務むるの意なり。程子の曰く、此の言至りて淺し。然も當時の諸侯果たして此を能くせば、亦以て其の國を治むるに足れり。聖人の言至りて近しと雖も、上下皆通ず。此の三言は、若し其の極を推せば、堯舜の治も亦此に過ぎず。常人の近きを言ふが若きは、則ち淺近のみ。楊氏の曰く、上敬せずんば則ち下慢（あなど）り、信あらずんば則ち下疑ふ。下慢りて疑へば、事立たず。事を敬して信あるは、身を以て之に先んずるなり。易に曰く、節するに制度を以てすれば、財を傷（やぶ）らず、民を害（そこな）はず。蓋し用を侈（おご）れば則ち財を傷（やぶ）る。財を傷（やぶ）れば必ず民を害（そこ）なふに至る。故に民を愛すは必ず用を節するを先にす。然るに之を使ふに其の時を以てせざれば、則ち本を力むる者自ら盡くすを獲ず。人を愛するの心有りと雖も、人其の澤（たく）を被らず。然り此れ特（ただ）に其の存する所を論ずるのみ。未だ政を爲すに及ばず。苟も是の心無ければ、則ち政有りと雖も行はれず。胡氏の曰く、凡そ此の數（あま）たの者、又皆敬を以て主と爲す。愚謂ふ、五つの者反復相因りて、各々次第有り。讀者宜く細かに之を推すべし。
■現代語では道dàoと導dǎoに分かれているが、昔は導という字がなく、道の上声dàoが道、道の去声dǎoが導の意味であった。■主一無適　程頤は、仏教、道教に対して、心の修養法として、論語、憲問篇「己を修めるに敬を以てす」及び易経、坤卦文言伝の「君子は敬もって内を直し、義もって外を方す。敬義、立ちて徳、孤ならず」から、心を一つの事に集中させ他にそらさないこと（主一無適）、持敬を唱へた。■食と兵と信、経済と軍事と信用。孔子は諸侯が国を運営するには、信用、経済、軍事の順を置いた。信、人（仕へる人：家臣）の信を得るには、事を敬して行ふこと、用を節して財政を健全化し、物より人を愛（いつく）しむ、民の信を得るには、四時（四季）に応じて働かせる。
読書会：[2011年7月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai7.html#2011年7月9日)

○　子の曰はく、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟（てい）、謹しみて信、汎く衆を愛して仁に親（ちか）づく。行ひて餘力有らば則ち以て文を學ぶ。弟子之弟、上聲。則弟之弟、去聲。謹者、行之有常也。信者、言之有實也。汎、廣也。衆、謂衆人。親、近也。仁、謂仁者。餘力、猶言暇日。以、用也。文、謂詩書六藝之文。程子曰、爲弟子之職、力有餘則學文。不修其職而先文、非爲己之學也。尹氏曰、德行、本也。文藝、末也。窮其本末、知所先後、可以入德矣。洪氏曰、未有餘力而學文、則文滅其質。有餘力而不學文、則質勝而野。愚謂、力行而不學文、則無以考聖賢之成法、識事理之當然、而所行或出於私意。非但失之於野而已。弟子の弟は上聲dì。則弟の弟は去聲tì。謹は、行(こう)の常有るなり。信は、言（こと）の實有るなり。汎は廣なり。衆は衆人を謂ふ。親は近なり。仁は仁者を謂ふ。餘力は、猶暇日と言ふがごとし。以は用なり。文は詩書六藝（りくげい）の文を謂ふ。程子の曰く、弟子の職を為して、力（つと）めて餘り有れば則ち文を學ぶ。其の職を修めずして文を先にするは、己が爲にする學に非ざるなり。尹氏の曰く、德行は本なり。文藝は末なり。其の本末を窮め、先後する所を知れば、以て德に入る可し。洪氏の曰く、未だ餘力有らずして文を學ぶは、則ち文其の質を滅す。餘力有りて文を學ばざるは、則ち質勝ちて野なり。愚謂（おも）へらく、力め行ひて文を學ばざれば、則ち以て聖賢の成法を考へ、事理の當然を識ること無くして、而して行ふ所或は私意に出づ、但之を野に失するのみに非ず。
■前句は諸侯、宰相の心得。これは、弟子の心得。家では孝、外では悌。敬事而信でなく謹而信、謹みて孝、悌を行ひ信のあること。節用而愛人でなく汎愛衆而親仁、広く衆を愛しみ、仁者に従ふ。使民以時でなく行有餘力則學文、孝悌、愛衆、親仁を実践して余力がもてるようになれば、詩書六藝を學ぶが順序。

○　子夏が曰く、賢を賢として色に易（か）へ、父母に事（つこうまつり）て能く其の力を竭（つく）し、君に事て能く其の身を致し、朋友と交はるに言ひて信有らば、未だ學びずと曰ふと雖も、吾は必ずやこれを學びたりと謂はん。子夏、孔子弟子、姓卜、名商。賢人之賢、而易其好色之心、好善有誠也。致、猶委也。委致其身、謂不有其身也。四者皆人倫之大者、而行之必盡其誠。學求如是而已。故子夏言、有能如是之人、苟非生質之美、必其務學之至、雖或以爲未嘗爲學、我必謂之已學也。游氏曰、三代之學、皆所以明人倫也。能是四者、則於人倫厚矣。學之爲道、何以加此。子夏以文學名。而其言如此、則古人之所謂學者可知矣。故學而一篇、大抵皆在於務本。吳氏曰、子夏之言、其意善矣。然辭氣之閒、抑揚太過。其流之弊、將或至於廢學。必若上章夫子之言、然後爲無弊也。子夏は孔子の弟子、姓は卜、名は商。人の賢を賢として、其の色を好むの心に易へるは、善を好むこと誠有るなり。致は猶委のごとし。致は其の身を委（ゆだ）ね、其の身有せざるを謂ふ。四つの者は皆人倫の大なる者にして、之を行ひて必ず其の誠を盡す。學は是の如きを求むるのみ。故に子夏、言ふ。能く是の如き人有らば、苟（いやしく）も生質の美に非ざれば、必ず其れ學を務むの至ならん。或は以て未だ嘗て學を爲さずと雖も、我は必ず之を已に學べりと謂はん。游氏の曰く、三代の學は皆人倫を明らかにする所以なり。是の四つの者を能くすれば、則ち人倫に於て厚し。學の道爲る、何を以てか此に加へん。子夏、文學を以て名あり。而も其の言此の如し。則ち古人の所謂學なるは知る可し。故に學而の一篇は、大抵皆本を務むるに在り。吳氏の曰く、子夏の言、其の意善し。然れども辭氣の閒、抑揚太だ過ぐ。其の流の弊、將に或は學を廢（す）つるに至らんとす。必ず上の章の夫子の言の若くして、然して後に弊無きとする。
■人の賢なるを賢として尊び、己が色を好むの心に易へ、以て善く好むの誠をなし、と後藤点に注さる。賢人を師として己を感化し、父母に仕へて家のあり方を身につける、君に仕へて仕事のあり方に身を委ねる、友と交わす言葉に信がある。「信は、言（こと）之れ實有るなり。」であった。つまりこれが學の質である。しかし、質のみでは不完全であり、文が必要、文とは、詩書六藝を學ぶことで身につくとなろう。■游氏（1077-1132）、儒門の出身、其の從兄名を為す、理學家游酢（1053-1123）。■吳氏　不明■子夏は絵画にも秀でている。賢賢易色は人の容色を賢に染めること。孔子の親仁の子夏流の解釈。子夏はまずは形から入りその心を育てる。入則孝とは事父母能竭其力、出則弟とは事君能其到身、謹而信とは與朋友交言有信。かくあれば、容色は學の準備ができている、キャンバスは上々、あとは描くのみ。■鄭玄、司徒に注して云く、同師朋と爲す、同志友と爲す。

○　子の曰はく、君子重からざれば則ち威ならず、學ぶも則ち固からず。重、厚重。威、威嚴。固、堅固也。輕乎外者、必不能堅乎内。故不厚重、則無威嚴、而所學亦不堅固也。重は厚重、威は威嚴、固は堅固なり。外に輕き者は、必ず内に堅きこと能はず。故に厚重ならざれば、則ち威嚴無くして、學ぶ所も亦堅固ならざるなり。
■朱熹は、君子は重くなければ、威もなく、學んでも堅固でないとする。君子は威りて堅固たれとする。學則不固を単独で、學べば固らず、學べば固陋でなくなると解することは可能であるが、學ぶにも重くなければならないといふ前提がある。重くあるには主忠信と続く。
　忠信を主とし、人不忠信、則事皆無實。爲惡則易、爲善則難。故學者必以是爲主焉。程子曰、人道唯在忠信。不誠則無物。且出入無時、莫知其郷者、人心也。若無忠信、豈復有物乎。人忠信ならざれば、則ち事（こと）、皆實無し。惡を爲すは則ち易く、善を爲すこと則ち難し。故に學者は必ず是を以て主とす。程子の曰く、人の道は唯忠信に在り。誠ならずんば則ち物無し。且出入に時無く、其の郷を知ること莫きは人の心なり。若し忠信無くば、豈復物有らんや。
■朱熹は忠信を主とせねば、何をしても実が伴はないとする。
　己に如ざる者を友とすること無かれ。無、毋通。禁止辭也。友所以輔仁。不如己、則無益而有損。無は毋に通ず。禁止の辭なり。友は仁を輔くる所以なり。己に如かざれば、則ち益無くして損有り。
■これは厳しい。弟子でなく友である、孔子に友は居たのか？孔子ほどの人間が無友不如己者と志せば、友となる人はあったのだろうか。相手を不如己者として、友とせずば、尊大なる人間と見なされようし、大変な孤独に陥る。また、相手をよく知ることが出来ねばならない。
　過てば則ち改るに憚ること勿かれ。勿亦禁止之辭。憚、畏難也。自治不勇、則惡日長。故有過則當速改。不可畏難而苟安也。程子曰、學問之道無他也。知其不善、則速改以從善而已。程子曰、君子自修之道、當如是也。游氏曰、君子之道、以威重爲質、而學以成之。學之道、必以忠信爲主、而以勝己者輔之。然或吝於改過、則終無以入德、而賢者亦未必樂告以善道。故以過勿憚改終焉。勿も亦禁止の辭。憚は畏難（びくびくする）なり。自ら治めて勇ならざれば、則ち惡日々に長ず。故に過有れば則ち當に速かに改めて、畏難して苟も安ず可からず。程子の曰く、學問の道は他無し。其の不善を知れば、則ち速かに改め以て善に從ふのみ。程子の曰く、君子の自ら修むる道は、當に是の如くす。游氏の曰く、君子の道は、威重を以て質と爲し、學を以て之を成す。學の道は、必ず忠信を以て主とし、己に勝れる者を以て之を輔く。然れども或は過を改むるに吝（やぶさか）なれば、則ち終に以て德に入ること無くして、賢者も亦未だ必ずしも告（かた）るに善道を以することを樂（この）まず。故に過は改むるに憚ること勿きを以て終す。
■その厳しい道をゆくならば、人が過ちを指摘してくれることも少ない。自分自身で自分の過ちに気付けなくてはいけない、また、気付けば改めることが出来ねばならない。本来は、直言してくれる友を有し、過則勿憚改。
読書会：[2011年9月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年9月17日)

○　曾子の曰く、終を愼しみて、遠を追へば、民の德、厚きに歸す。愼終者、喪盡其禮。追遠者、祭盡其誠。民德歸厚、謂下民化之、其德亦歸於厚也。蓋終者、人之所易忽也。而能謹之。遠者、人之所易忘也。而能追之。厚之道也。故以此自爲、則己之德厚、下民化之、則其德亦歸於厚也。終はりを愼むは、喪に其の禮を盡くす、遠きを追ふは、祭に其の誠を盡くす、民の德厚きに歸すは、下民之に化し、其の德も亦厚きに歸するを謂ふ。蓋し終は、人の忽（いるかせ：ゆるがせ）し易き所なり。而して能く之を謹む。遠きは、人の忘れ易き所なり。而して能く之を追ふ。厚きの道なり。故に此を以て自ら爲すは、則ち己の德厚く、下民之に化すれば、則ち其の德も亦厚きに歸す。
■朱熹は、愼終と追遠を、喪盡其禮と祭盡其誠とした。死者を禮を尽して葬る、宗廟の祭祀に誠を尽す。国君がそれを尽くせば、民もそれに感化され、その徳が厚くなるとした。しかし、これを国君と民の対比のみでなく、弟子に対して述べたものとみ、人としてのあり方に言及しているともみた。

○　子禽、子貢に問ひて曰く、夫子の是の邦に至るや、必ず其の政を聞けり。之を求むるか、抑（そもそ）も之を與（あた）ふるか。之與之與、平聲。下同。○子禽、姓陳、名亢。子貢、姓端木、名賜。皆孔子弟子。或曰、亢、子貢弟子。未知孰是。抑、反語辭。之與の與yúは平聲。下も同じ。○子禽は、姓は陳、名は亢。子貢は、姓は端木、名は賜。皆孔子の弟子。或ひと曰く、亢は子貢の弟子、と。未だ孰か是なるを知らず。抑は反語の辭。
■子禽を子貢の弟子とする説もあるが定かではない。後藤点では、夫子到るところ必ず其国の政事を與り聴くは、夫子より之を求めて後得らるるか、そもそも時君其政事を以て就て之を相謀るが、孰れぞや、とする。
　子貢が曰く、夫子温良恭儉讓（おんりょうきょうけんじょう）以て之を得たり。夫子の之を求むるや其れ諸れ人の之を求むるに異るか。溫、和厚也。良、易直也。恭、莊敬也。儉、節制也。讓、謙遜也。五者夫子之盛德光輝接於人者也。其諸、語辭也。人、他人也。言夫子未嘗求之、但其德容如是。故時君敬信、自以其政就而問之耳。非若他人必求之而後得也。聖人過化存神之妙、未易窺測。然卽此而觀、則其德盛禮恭、而不願乎外、亦可見矣。學者所當僭心而勉學也。○謝氏曰、學者觀於聖人威儀之閒、亦可以進德矣。若子貢、亦可謂善觀聖人矣。亦可謂善言德行矣。今去聖人千五百年、以此五者想見其形容、尙能使人興起。而況於親炙之者乎。張敬夫曰、夫子至是邦、必聞其政。而未有能委國而授之以政者。蓋見聖人之儀刑、而樂告之者、秉彝好德之良心也。而私欲害之。是以終不能用耳。溫は和厚なり。良は易直なり。恭は莊敬なり。儉は節制なり。讓は謙遜なり。五つの者、夫子の盛德光輝、人に接する者なり。其諸は語の辭なり。人は他人なり。言ふは、夫子未だ嘗て之を求めず、但其の德容是の如し。故に時の君敬信して、自ら其の政を以て就きて之を問ふのみ。他人の必ず之を求めて後得るが若きに非ざるなり。聖人の過化存神（心に物を留めない様にすること）の妙、未だ窺ひ測り易からざる。然れども此に卽いて觀れば、則ち其の德盛んに禮恭しくして、外を願はざるも亦見る可し。學者の當に心を僭めて勉め學ぶ所のものなり。○謝氏の曰く、學者、聖人の威儀の閒を觀れば、亦以て德に進む可し。子貢の若き亦善く聖人を觀ると謂ふ可し。亦善く德行を言ふと謂ふ可し。今聖人を去ること千五百年、此の五つの者を以て其の形容を想ひ見れば、尙能く人をして興起せしむ。而して況や之に親炙（親しく接し感化を受ける）する者に於てをや。張敬夫曰く、夫子の是の邦に至り、必ず其の政を聞く。而れども未だ能く國を委ねて之に授くるに政を以てする者有らず。蓋し聖人の儀刑（儀型、手本）を見て、之に告ぐることを樂しむは、彝（い）を秉（と）り（人のふみ行うべき道を守る）德を好むの良心なり。而して私欲之を害す。是を以て終に用ること能はざるのみ。
■子貢は夫子（孔子）が求めた。ただ、他の人間ではそうはゆかない。先生の温良恭儉讓により相手が聞く耳を持ったとした。子貢は先生の見識の高さなどは云はず、その人柄を挙げた。国君があの先生なら自分の意見を聞いたうえで判断をしてくれると思へたのであろう。
読書会：[2011年9月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年9月24日)

○　子の曰はく、父在（ま）せば其の志を觀、父沒（ぼつ）すれば其の行（こう）を觀る。三年父の道を改むること無き、孝と謂ふ可し。行、去聲。父在、子不得自專。而志則可知。父沒、然後其行可見。故觀此足以知其人之善惡。然又必能三年無改於父之道、乃見其孝。不然、則所行雖善、亦不得爲孝矣。尹氏曰、如其道、雖終身無改可也。如其非道、何待三年。然則三年無改者、孝子之心、有所不忍故也。游氏曰、三年無改、亦謂在所當改而可以未改者耳。行xìngは去聲。父在せば、子自ら專（もっぱら）にすることを得ず。而れども志は則ち知る可し。父沒して、然して後に其の行見る可し。故に此を觀て以て其の人の善惡を知るに足れり。然れども又必ず能く三年父の道を改むること無くして、乃ち其の孝を見る。然らざれば、則ち行う所善と雖も、亦孝となすことを得ず。尹氏の曰く、其の道の如きは、身を終へて改むること無きと雖も可なり。如（も）し其れ道に非んば、何ぞ三年を待たん。然らば則ち三年改むること無きは、孝子の心、忍びざる所有る故なり。游氏の曰く、三年改むること無きは、亦當に改むべき所在りて以て未だ改めざる可き者を謂ふのみ。
■その子が孝であるかをどうして見分けるか。その父存命中は、その子の志を観なさい。亡くなられて後は、その子の行いを観なさい。これには三年の喪が対応するが、まともに三年の喪に服せば、父のやり方を変へることはない。ただ、これは短縮されたり、行はれないこともあり、その場合の心得を必要とした。父があきらかに道にはずれたことをやっている場合、改めるべきではあるが、それ以外変更を加へることは孝とされなかった。先祖からのその家のあり方に関するものであり、善しにつけ悪しきにつけ、三年は父の路線の影響下を免れず、父の遺志を尊重すべしとしたのであろう。■ただ、国レベルとなると対応が異なる。義疏によれば、「若し父の政惡、惡教にして民を傷み、寧して改めざる可きか。答へて曰く、本より父の政の善惡を論ぜず、孝子の心自ら論じるのみ、若し人君の風政の惡、則ち冢宰、自ら政を行ひ、若し卿大夫の惡、則ち其の家相、邑宰、自ら事を行ひ、孝子に關する無きなり。」とあり、放置すべしとした。

○　有子が曰く、禮の用は、和を貴しと爲す。先王の道斯れ美たり、小大之に由る。禮者、天理之節文、人事之儀則也。和者、從容不迫之意。蓋禮之爲體、雖嚴、然皆出於自然之理。故其爲用、必從容而不迫。乃爲可貴。先王之道、此其所以爲美、而小事大事、無不由之也。禮は、天理の節文（物事をほどほどにして飾る）、人事の儀則（手本）なり。和は、從容、不迫の意。蓋し禮の體爲る、嚴なりと雖も、然れども皆自然の理に出づ。故に其の用爲ることは、必ず從容として迫らず。乃ち貴ぶ可しとす。先王の道、此れ其れ美たる所以にして、小事大事、之に由らざること無し。
■義疏は、「必ず禮樂は相須（互いを必要とする）、樂を用ゐば民心和す、禮を以て民跡（民のあり方）を檢（つつまし）くす。跡檢くして心和す、故に、風化乃ち美。故に云ふ、禮の用和を貴しと爲す。・・・先王、聖人を謂ひて天子と為すは、斯れ此れなり。聖天子の化行を言ひて禮、亦此の用を以て和を美とす。」とした。■朱熹は、禮を天理、和の意を従容とし禮の（本）体とした。■禮記、禮運に、「故に、聖王は義を柄として、禮を序としてその身を脩め、人情を治める。つまり、人情といふものは、聖王の耕す田である。禮を身に脩めて耕し、義を陳（の）べ、これを種（う）へ、學を講じて耨（くさぎり）して、苗がそだつようにする。仁に本づいて人々を聚め、樂をひろめて人々を安んじる。故に、禮を義の實といふ。これ（ある實）が義に照らして合ふならば、それに関する禮といふものは、先王が未だ定めたものでなくとも、義とさだめてよい。義は、諸藝における相違を分けるものであり、仁に照らし合はす符節である。藝に適ひ、仁により人々を和解、結合させることを得るものは強い。仁は義の本にあり、順という行為を統べ、これを得るものは尊い。故に、國を治めるに禮を用ゐぬは、耜なくして耕す、禮を為して義に本づかざるは、耕して苗を種えぬ、義を為してこれを講ずるに學を用ゐぬは、苗を種えて除草せぬ、これを講ずるに學を用ゐこれを照らし合はせるに仁を用ゐぬは、除草して収穫をせぬ、これを照らし合はせるに仁を用ゐ、これを安んじるに樂を用ゐざるは、収穫して食さぬ、これを安んじるに樂を用ゐ順に逹せざるは、食して肥えぬようなものである。」とある。■小大由之は、次の亦不可行の亦を考えれば、小大由之　有所不行であるが～であれば亦とつなげる方が通る。禮を行ふ、喪や先祖の祭りにおいて、同じ行為をしても、お互いの間に和が無いと、恭しくしたつもりが、尊大と捉へられることもあろう。これでは何をしても、行はれなかったことになろう。亦、親しき仲にも礼儀あり、親しいからと礼を失すれば、相手を損ね怒らせることもある。
　行はれざる所有ることは、和を知りて和すれども、禮を以て之を節せざれば、亦行はる可からず。承上文而言。如之而復有所不行者、以其徒知和之爲貴、而一於和、不復以禮節之、則亦非復禮之本然矣。所以流蕩忘返、而亦不可行也。程子曰、禮勝則離。故禮之用、和爲貴。先王之道、以斯爲美。而小大由之。樂勝則流。故有所不行者。知和而和、不以禮節之、亦不可行。范氏曰、凡禮之體主於敬、而其用則以和爲貴。敬者、禮之所以立也。和者、樂之所由生也。若有子、可謂達禮樂之本矣。愚謂嚴而泰、和而節、此理之自然、禮之全體也。毫釐有差、則失其中正、而各倚於一偏。其不可行均矣。上の文を承けて言ふ。之の如にして復た行はれざる所有るは、其れ徒（ただ）に和の貴しと爲すことを知るを以て、而も和に一にして、復た禮を以て之を節せざれば、則ち亦、復た禮の本然に非ざる。流蕩して返るを忘れて、亦行はる可からざる。程子の曰く、禮勝てば則ち離る。故に禮の用は、和を貴しと爲す。先王の道、斯れを以て美と爲す。而して小大之に由る。樂勝てば則ち流る。故に行はれざる所の者有り。和を知りて和すれども、禮を以て之を節せざれば、亦行はる可からず。范氏の曰く、凡そ禮の體は敬を主として、其の用は則ち和を以て貴しと爲す。敬は、禮の立つ所以なり。和は、樂の由りて生ずる所なり。有子の若きは、禮樂の本に達すと謂ふ可し。愚謂えらく、嚴にして泰、和にして節は、此れ理の自然、禮の全體なり。毫釐も差有れば、則ち其の中正を失ひて、各々一偏に倚る。其れ行う可からざること均し。
■子路篇に、「君子は和して同せず、小人は同して和せず。」とある。■禮を行ふに、和を貴とするといふこと、また、禮を以て和を節せずば、行はれるべからずとしたのは、有子の独自の解釈であったろう。朱熹の師の時代には、体用の思想にあてはめ、禮の体は敬を主とし、禮の用を和を以て貴と為すとし、和は楽による、楽勝てば流れ、不行という図式が作られた。朱熹は、禮は厳格であってゆったりとする、和するが節（自制）するのは、理の自然と片付けてしまった。
読書会：[2011年10月1日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年10月１日)

○　有子が曰く、信義に近づけば、言（こと）復（ふ）む可し。恭禮に近づけば、恥辱に遠ざかる。因、其の親を失はざれば、亦宗とす可し。近･遠、皆去聲。信、約信也。義者、事之宜也。復、踐言也。恭、致敬也。禮、節文也。因、猶依也。宗、猶主也。言約信而合其宜、則言必可踐矣。致恭而中其節、則能遠恥辱矣。所依者、不失其可親之人、則亦可以宗而主之矣。此言人之言行交際、皆當謹之於始、而慮其所終。不然、則因仍苟且之閒、將有不勝其自失之悔者矣。近jìn･遠yuànは皆去聲。信は信を約すなり。義は事の宜しきなり。復むは言を踐むなり。恭は敬を致すなり。禮は節文なり。因は依るのごとし。宗は主のごとし。言ふは、信を約して其の宜に合へば、則ち言必ず踐む可し。恭を致して其の節に中（あた）れば、則ち能く恥辱に遠ざかる。依る所の者、其の親しむ可き人を失はざれば、則ち亦以て宗にして之を主す可し。此れ言ふは、人の言行交際、皆當に之を始めに謹みて、其の終わる所を慮るべし。然らずんば、則ち因仍、苟且の閒、將に其の自失の悔に勝（た）へざる者有らんと。
■朱熹は、人の言行交際は、誰もまずかしこまりて始め、その終わりをよく考えねばならない、自分でよく考えよとする。因はもとのままに従う、仍は先例によること、苟且（こうしょ）は、かりそめ、なおざり、一時のまにあわせ。さもなくば、因仍すれば、かりそめの間といえども、自失したことに後悔することになるとした。後藤点では、「依り頼む所の親しむべき人を遺失せざれば、則人も亦己を宗家の主として仰ぎ尊むべし」とする。有子の言葉は分かりにくい。ここは頼るには人選を誤らねば、その人を中心にしてやってゆける・・・とか、因を姻と解し、姻戚との関係は、その親密さが度を越えなければ（父系親族との親密さを越えなければ）、本家（宗族）の信頼を維持できる、とみるなど諸説がある。■親はひとにまかせず、自身でしたしく行うこと。■人との間の信（まこと）は、義にかなえばかなうほど、言ったことが実現される、不義であれば、言は行はれない。恭しさが禮にかなわねば恥じをかくが、禮にかなえば、恥じをかかない。因、師の教えや先例によって行ふとしても、親（みずか）ら行ふことを失はねば、自分が宗となり、それを後に伝へることができる。

○　子の曰はく、君子は食飽かんことを求むること無く、居安きこと求むること無く、事（わざ）に敏（と）くして、言（こと）に愼む。有道に就いて正すを學を好むと謂ふ可きのみ。好、去聲。不求安飽者、志有在、而不暇及也。敏於事者、勉其所不足。愼於言者、不敢盡其所有餘也。然猶不敢自是、而必就有道之人、以正其是非、則可謂好學矣。凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者也。尹氏曰、君子之學、能是四者、可謂篤志力行者矣。然不取正於有道、未免有差。如楊･墨、學仁義而差者也。其流至於無父無君。謂之好學可乎。好hàoは去聲。○安飽を求めざる者は、志在ること有りて、及ぶに暇（いとま）あらざれば、事に敏き者は、其の足らざる所を勉む。言（こと）に愼む者は、敢えて其の餘り有る所を盡くさざるなり。然るに猶敢えて自ら是とせずして、必ず有道の人に就きて、以て其の是非を正せば、則ち學を好むと謂ふ可し。凡そ道と言ふは、皆事物當然の理、人の共に由る所の者を謂ふなり。尹氏の曰く、君子の學、是の四つの者を能くす、篤く志し力めて行ふ者と謂う可し。然れども正を有道に取らざれば、未だ差（たが）ひ有ることを免れず。楊･墨が如き、仁義を學びて差ふ者なり。其の流、父無く君無きに至る。之を學を好むと謂ふは可ならむか。
■君子は美食、広宅を求むるに非ず、これは当時の人々のみならず、いつの世にも人が求めるものである。よく仕事をし、他人を批判するよりは、己の言動を優れた人の言動に照らして正す、学を好むとはそういうことだ。己を正すことができずば、学識を積むといへども学を好むとは言へぬと厳しい。ただ、その結果として、美食と広宅を得ることを否定するものではない。
読書会：[2011年10月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年10月8日)

○　子貢が曰く、貧しふして諂ふこと無く、富みて驕る無きは何如ん。子の曰はく、可なり。未だ貧しふして樂しみ、富みて禮を好む者には若（しか）ず。樂、音洛。好、去聲。諂、卑屈也。驕、矜肆也。常人溺於貧富之中、而不知所以自守。故必有二者之病。無諂無驕、則知自守矣。而未能超乎貧富之外也。凡曰可者、僅可而有所未盡之辭也。樂則心廣體胖、而忘其貧。好禮則安處善、樂循理、亦不自知其富矣。子貢貨殖。蓋先貧後富、而嘗用力於自守者。故以此爲問。而夫子答之如此。蓋許其所已能、而勉其所未至也。樂lèは音洛。好hàoは去聲。諂は卑屈なり。驕は矜肆（きょうし；おごりたかぶりほしいまま）なり。常人は貧富の中ちに溺れて、自ら守る所以を知らず。故に必ず二つの者の病有り。諂ふこと無く驕ること無きは、則ち自らに守ることを知る。而れども未だ貧富の外に超ること能はざる。凡そ可と曰ふは、僅かに可にして未だ盡くさざる所有るの辭なり。樂しむは則ち心廣く體胖（のびやか）にして、其の貧を忘る。禮を好むは則ち善に處るを安んじ、理に循ふこと樂しみて、亦自ら其の富を知らざる。子貢貨殖す。蓋し先に貧しく後に富み、嘗て力を自ら守るに用いる者なり。故に此を以て問いをなす。而るを夫子之に答ふること此の如し。蓋し其の已（すで）に能くする所を許して、其の未だ至らざる所を勉む。
■貧した者は富み力ある者に諂ふ。富める者は驕る。これは世の常。子貢は自らを貧しても諂はず、富みても驕らぬとした。これは凡人には為しがたい。ところが孔子は、貧しても楽しむ、富みて禮を好む。貧しても楽しむは顔回の境地、富みて禮を好むは孔子の境地。[衛霊公篇2](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/eireiko.doc)の「君子も亦窮すること有るか。子の曰はく、君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫る。」に匹敵する。■後藤点は、子貢はかつて貧しく、後に富んだ、しかし自守に力を用い、諂と驕の二つの弊害を克服した。孔子は、子貢の努力を可と認めた、しかし、未だ至らざる所を勉めせしめた、とする。
　子貢が曰く、詩に云ふ。切るが如く磋（す）るが如く、琢（うがつ）が如く磨くが如し。其れ斯れを謂ふか。磋、七多反。與、平聲。詩、衛風淇澳之篇。言治骨角者、旣切之、而復磋之、治玉石者、旣琢之、而復磨之。治之已精、而益求其精也。子貢自以無諂無驕爲至矣。聞夫子之言、又知義理之無窮、雖有得焉、而未可遽自足也。故引是詩以明之。磋cuōは七qī多duōの反。與yúは平聲。詩は衛風の淇澳の篇。言ふは、骨角を治むる者は、旣に之を切りて復之を磋る。玉石を治むる者は、旣に之を琢ちて復之を磨く。之を治むること已に精（こまやか）にして益々其の精（こまか）きを求む。子貢自ら諂ふこと無く驕ること無きを以て至れりとす。夫子の言を聞き、又義理の窮まり無きを知る。得ること有りと雖も、而して未だ遽（にはか）に自ら足るとす可からざる。故に是の詩を引きて以て之を明らかにす。
■子貢は孔子の意図を察知し、詩を引用した。■磋はやすりで骨などをすりみがく、切磋。琢は鎚（つち）や鑿（のみ）で打って玉をみがく、彫琢。磨は砥石ですりみがくこと、練磨。切るのみではなく磋りみがく、琢つのみでなく磨く、更に更に精緻に仕上げる。人の言行も同様。
　子の曰はく、賜や、始めて與に詩を言ふ可きのみ。諸に往（おふ）を告げて來（らい）を知る者なり。往者、其所已言者。來者、其所未言者。愚按、此章問答、其淺深高下、固不待辨說而明矣。然不切則磋無所施、不琢則磨無所措。故學者雖不可安於小成、而不求造道之極致、亦不可騖於虛遠、而不察切己之實病也。往は其の已に言ふ所の者。來は、其の未だ言はざる所の者。愚按ずるに（私の思ふに）、此の章の問答、其の淺深高下、固より辨說を待たずして明らかなり。然れども切らざれば則ち磋施す所無く、琢かざれば則ち磨措く所無し。故に學者は小成に安んじて道に造（いた）るの極致を求めずんばある可からずと雖も、亦虛遠に騖（は）せて己に切なるの實病を察せずんばある可からざるなり。
■朱熹は、切琢せずば、磋磨はない、切琢に満足して磋磨を求めないのはダメであるが、磋磨を目指すに、己に実病（諂や驕など）のあることを察することが出来ねばダメであるともした。■告諸往而知來者　すでに発せられた言葉から、まだ発せられていないことを知る。ツーと言えばカーと答へる。子貢が意図したことを分かってくれた。一段高みへと登ってくれたといふ実感、不亦説乎。これが次句につながる。

○　子の曰はく、人の己を知らざることを患へず、人を知らざることを患ふ。尹氏曰、君子求在我者。故不患人之不己知。不知人、則是非邪正、或不能辨。故以爲患也。尹氏の曰く、君子は我に在る者を求む。故に人の己を知らざることを患へず。人を知らざれば、則ち是非邪正、或は辨ずること能はず。故に以て患いとす。
■患不知人について、尹氏の言葉を引用した。君子は己にあるものを求めるから、人が己を知らなくても患ふことはない。かといって人を知らないと、是非、邪正、或は弁じることが出来ない、だから患ふとしている。妙な解釈である。まるで、座禅を組んで己のこころを内観するのを人が知ろうが知るまいが関係ない、しかし、世の中のこととなれば、その人を知らねば是非も邪正も、その批評もできないみたいな話で、筋が異なる。朱熹は自分の言葉で注を施さなかった。
■人不知而不慍不亦君子乎（学而篇1）また、子曰不患人之不己知患其不能也（憲問篇32）ともある。人が己を知ってくれない、用ゐられない、これは辛い現実である。慍、いかる、うらむ、うつうつ、いらいらとする。これを何度繰り返したことであろう。よくよく考えてみれば、相手が悪かった。彼が私に求めているものが違っていた。その彼を納得させられると思い込んでいた私が愚かであった。話が通じる相手であるか、それが見極められなかったのは己の不覚。子路には通じること、子貢には通じること、顔回には通じること、それぞれ異なる。相手を知ってこそ、相手を一歩でも高みへと誘ふことができる、孔子が教師たる所以である。
読書会：[2011年10月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai8.html#2011年10月29日)